

<p>上演11 2025年7月28日(月)1校目 開催県(香川) 香川県立善通寺第一高等学校 「A Happy Christmas」</p>	<p>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第71回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 佐賀県立鳥栖商業高等学校 山田 裕太</p>
--	--

この劇では、「普通」や「当たり前」といったキーワードが飛び交う。公演を控え、練習中のある演劇部。そのうちの1人、翠璃は両親がおらず祖父は入院しており、祖母との二人暮らし。もう1人の葉は母から有名大学に合格して、上場企業に就職するよう言われ続けていた。徐々に演劇部の活動に支障をきたすようになる翠璃と、フラストレーションの捌け口が演劇部となっていく葉によって、演劇部内の人間関係に亀裂が走るようになってしまう。

私自身も親と色々あり、登場人物たちと自分を重ねて観ていた。そのことについて討論の場で話すか本当に迷ったが、楽しいことも苦しいことも一緒に経験した仲間だからこそ、打ち明けようという気持ちになり、話してみた。話し始めた時は、とても不安だったが、みんな真剣に聞いてくれて、話して良かったと思えた。劇中の登場人物たちも、きっと自分の気持ちを伝えることができたのは、この人たちなら受け止めてくれると思ったからだと思う。観終わった後に、仲間の大切さについて改めて考えることができた。

また、壊れたクリスマスツリーを見た裏方が言った、「壊れたら直すだけ」というセリフが印象的だった。劇中では直すだけでなく、さらに飾りを付け足してグレードアップさせていたが、これは人と人との関係性にも言えることだと感じた。人間関係はずっと良好なわけではなく、亀裂が入った時には、その関係を修復しようとする。さらに直すだけでなく、もっと良い関係を築くための苦労をいとわず、より良い関係性の構築を目指そうとする。そのことと重なって見えた。特に演劇は、舞台の上に立つ役者だけでなく、ものを作る小道具係や照明係、音響係など裏方も一緒に作り上げるもので一人一人欠かせないものだ。時には思いがぶつかり合うこともあるが、話し合うことでお互いの思いを知ることになり、チームとして成長していく。改めて、仲間との絆やコミュニケーションの大切さについて考えさせられた。

討論の中で、演出や照明効果についても話題に挙がった。葉と怜がベンチに座っている場面では、葉だけが照明から外れ、娘に理解がある親がいる怜と理解がない親がいる葉とが陰と陽になっており、対比が分かりやすかったという意見も出た。

クリスマスの奇跡という言葉があるように、ラストのクリスマスパーティーは、自分自身が囚われていた当たり前から解放され、各々が清々しい顔をして純粋にパーティーを楽しんでいた姿に登場人物たちの成長を感じ、心温まる幕締めだった。

